

龍神になった皇円

—孝行集と法然上人伝—

坪 井 直 子

要 約 法然の師である肥後阿闍梨皇円が、弥勒の出世を待つて龍蛇となり、遠江国の桜ヶ池に住むという説話が法然伝にある。中世の唱導資料である孝行集にも、この説話が収録されていることから、その収録話について、法然伝の系譜上の位置を考察した。その結果、一期物語に拠っていて、絵図を伴う法然伝と関わることが判明した。また、この説話は、弥勒信仰を批判したものとされているが、孝行集と題される文献に収録されていることから、孝行説話としても捉えられていたことが分かる。師弟間の説話がなぜ孝行の範疇に入るのか、その理由を考察し、梵網經に説かれる父母、師僧への孝順が底流にあると推定した。

一、遠州桜ヶ池説話の問題点

法然に天台教学を伝授したとされる肥後阿闍梨皇円は、五十六億七千万年後の弥勒の出世に逢うことを願って、長命の龍蛇となり、遠江国笠原庄桜ヶ池（桜の池とも言う。静岡県御前崎市佐倉、旧小笠郡浜岡町佐倉）に住むと言う。この話を伝え聞いたらしい法然は、次のように語っている（法然上人行状

絵図卷三十に拠る）。

智恵ありて生死の出がたきことをしり、道心ありて慈尊にあはむ事をねがふといへども、よしなき畜種の生を感じること、しかしながら浄土の法門をしらざるゆへなり。源空そのかみ此法をたづねえたらましかば、信不信をかへりみず、さづけ申なまし

法然の法語を含む、この遠州桜ヶ池説話は、弥勒信仰、或い

は旧仏教に対する専修念仏の優越性を示すものとされ、法然の初期の伝記である本朝祖師伝記絵詞（法然上人伝法絵流通とも言う。以下、伝法絵とする）や醍醐三宝院藏法然上人伝記附一期物語（以下、一期物語とする）から、集大成ともいべき法然上人行状絵図（四十八巻。以下、行状絵図とする）まで、殆どの法然伝に取り上げられていて、重要視されていたことが分かる。

批判の対象とされる肥後阿闍梨皇円は、尊卑分脈に拠れば、栗田関白藤原道兼五代の孫で、父は三河権守重兼。源信の系統の相生流皇覺に師事して出家、顕密二經を受け、神武天皇より堀河天皇までの歴史を仏教中心に略述する編年体の史書、扶桑略記三十巻を編纂したという天台の碩学である。なお、法然諸伝は必ずしも皇円としているわけではなく、例えば一期物語には「肥後阿闍梨」とだけあるし、談義本と言われる法然伝正源明義鈔は、肥後阿闍梨を法然比叡山最初の師とされる源光のこととする。肥後阿闍梨が誰であるにせよ、桜ヶ池説話が、弥勒信仰、旧仏教を批判していることには変わりがないだろう。

この肥後阿闍梨がいかなる人物であるか、また桜ヶ池説話に込められた批判とは何かについて、井上光貞氏の優れた見解がある。氏は、この説話が法然からの聞書であることに注意しつつ、この説話に輪廻転生説や捨身往生といった「当時の民間浄

土教に多くみいだされるさまざまの思想傾向をみいだすことができる」ことを指摘し、「思うに肥後阿闍梨は、中古天台の法脈をうけ、伝の記載によれば智慧甚深であつたが、やがて出離の縁を求めて離山し、かゝる智慧・教学の世界とは絶縁して、当時ふつうの民間浄土教の世界にこの世を終つたのではあるまいか」と推測している。そして、この説話の法然の法語が、「当時の民間浄土教の頽廃と後に法然の樹立した浄土門とが、その基盤をひとしく民衆世界におきながら全く異質のものであつたことを鮮やかにえがきだ」すと述べている¹⁾。

民間浄土教の批判を主眼とするであろう桜ヶ池説話が、なぜか孝行譚ばかりを集めた、中世の唱導資料である孝行集に収録されている。皇円と法然という師弟関係が、親子関係に準じるからだろうが、四十条ある孝行集の因縁譚中、師弟関係が一条のみというのは、聊か特異な印象を受ける。果たして師弟関係における行為も孝行というのだろうか。また、この説話の法然の法語を検討するならば、そこには弥勒を信仰した師への嘆きを感じられても、孝行と言うべきものは認めがたい。孝行集収録の桜ヶ池説話は、どのようなことをもって孝行とするのだろうか。

これら二つの問題を明らかにするために、特に法然の桜ヶ池下向の伝承に注目したい。法然が桜ヶ池に住む皇円の下を訪れ

たという伝承は、史実ではなく後世に生成されたものである。それは、主として一部の法然伝や現地の伝承に認めることが出来、民衆の間に流布していたようだから、唱導の場で民衆に向かって語られていたと思われる孝行集の因縁譚を考察するに、良い手掛かりになるだろう。

遠州桜ヶ池説話は、長大な法然伝の一部に過ぎないが、それでも民衆の間で法然伝や法然説話がどのように享受されていたか、その一端を窺い知ることは出来ると思う（法然伝を生涯の伝記、法然説話を、生涯の一部分の伝記とする）。孝行集に収録された桜ヶ池説話を通じて、そのことを考えてみたい。

二、孝行集と法然諸伝との関係

孝行集収録の桜ヶ池説話を考察するに際し、先ず孝行集がどのような唱導資料であるかを簡単に確認しておきたい。静嘉堂文庫に蔵される孝行集は、奥書に「慶長四年正月廿五日於洛陽東山禅林教寺下寮／書写之南無阿弥陀仏 粗諫之」とあり、慶長四（一五九九）年に京都市左京区の聖聚来迎山禅林寺（永観堂）において粗諫（未詳）により写されたらしい²。その成立時期は未詳であるが、沙石集を典拠とする説話を収録することから、それ以後となるだろう。本書は、孝子因縁譚四十条から成

り、主として孝子伝系の説話を収めるが、それだけでなく二十四孝関連の説話もあり、また私聚百因縁集とも関連する説話をも収める。本稿で取り上げる桜ヶ池説話は、第三十八条に収録されている。

孝行集収録の桜ヶ池説話には、冒頭に「法然上人御物語云」とある。「法然上人御物語」が典拠名を指すのか、或いは「法然上人がお語りになった」を意味するのかは判然としない。というの、は、「上人がお語りになった」と解することも出来るが、孝行集第四十条には「往生伝云」とあって、孝行集が典拠名を示す場合もあるからである。しかし、一期物語や法然聖人絵（残欠四巻。黒谷上人伝とも言う。以下、弘願本とする）といった法然伝の桜ヶ池説話が、それぞれ「或時物語云」「或時上人物語云」で始まることから判断して、法然伝に典拠を求めていることは出来そうだが、したがって、次に、孝行集の典拠となっている法然伝が、その系譜上において、どこに位置するかについて検討したい。

検討に入る前に、法然伝の系統について概観しておく。従来、初期の法然伝として、一期物語、源空聖人私日記（以下、私日記とする）、伝法絵、知恩講私記が上げられ、それらを基に系統が考えられてきた。しかし、中井真孝氏は、私日記が一期物語や伝法絵を基とする二次的な法然伝であるとして、次の

ように三つの系統に分けることを提言している⁽³⁾。

第一は源智系の「一期物語」。別名「法然上人伝記」と呼ばれるが、実際は教義を述べた語録的なもので、法然の思想研究の基礎史料となる。第二は信空・湛空系の『絵詞』。別名『伝法絵』と呼ばれ、布教伝道用の絵巻物だが、詞書は伝記の体裁をとり、法然生前の事蹟ならびに滅後の法難を述べ、年紀の明らかなるは年代順に配し、不明なるは類推して、これをほぼ編年体にとめており、比較的整った伝記史料は実のところ本書をもって嚆矢とする。第三は隆寛系の『私記』〔稿者注、知恩講私記〕。法然の墓堂において忌日ごとに遺徳を讃読した詩文というべく、右の兩者の中間的存在である。

つまり、伝記とするに相応しいものは第二の伝法絵の系統となる。絵図とその説明の詞書とから成るこの系統は、詞書に法然の法語や教義などが挿入されて次第に内容を豊かにしてゆく。

また絵図と詞書とが分離されて、絵図が掛幅絵伝へ、詞書が冊子となり談義本へとなってゆくのである。

桜ヶ池説話を収録する主な法然伝を、系統を確認しつつ上げるならば、第一の系統に一期物語、私日記、私聚百因縁集巻八、拾遺漢語燈録所収浄土随聞記。第二の系統に、伝法絵巻一、弘願本巻二、法然上人伝絵詞巻二（以下、琳阿本）、拾遺

古徳伝絵巻二（以下、古徳伝）、法然上人伝記巻二上（以下、九卷伝）、行状絵図巻三十、黒谷源空上人伝巻八（十六門記ともいう）、知恩伝巻上がある。談義本とされる正源明義鈔巻三も第二の系統に含めて良いだろう。なお、法然伝以外の文献で桜ヶ池説話を伝えるものには、九卷伝に類似する月刈藻集巻中、正源明義鈔と内容が近似する謡曲「桜之池」、現地の伝承と関係する三国伝記巻十一・21、名古屋大学附属図書館小林文庫蔵因縁集がある。

さて孝行集は、冒頭部分から第一の系統に属す一期物語と、第二の系統に属す弘願本との関係が推定される。そこで先ず一期物語との関係を考察してみることにする。

大正七年に醍醐三宝院から発見された法然上人伝記附一期物語は、法然滅後三十年頃に成立したと言われている。全六篇の遺文即ち、「二期物語」〔或時遠江国蓮華寺住僧禪勝房参上人〕、奉問「種々之事」上人「一々答之」〔三心料簡事〕〔別伝記〕〔御臨終日記〕〔三昧発得之記〕から成り、桜ヶ池説話は、第一篇「一期物語」二十条のうちの第三条になる。次に孝行集と一期物語とを対照してみる⁽⁴⁾。

・孝行集

法然上人御物語云、古賢人聖人我カ出離計、可捨法ヲハ捨テ、可助取。我師匠肥後阿闍梨云人有。智恵深遠名

匠普聞。併自力分斎願、今度生死不可解脱、若今度生ヲ改、隔生即妄故定テ仏法可妄テ、長命報感シテ慈尊出世為待、長命思不過大蛇、我可成大蛇、但若住大海中、天恐可有。從是遠江国笠原庄内ニ桜池云テ有池、領家放文取、此池住為池辺行、仏具鈴杵等入ニ、不入上浮タリ。時阿闍梨云、此池主シ何ソ是ヲ不入、汝領家不乞、我ハ放文得、読懸下ヘハ即コフトテ入了。去テ返テ死期水取掌入死畢、彼池風モ不吹、俄波浪發立池中、諸人奇特思作怪、此様日記領家申。其日時勘、彼ア闍梨逝去日時當。有智恵一故生死難出事知、有道心一故仏在世値ト願。雖然淨土法門不知故成蛇待慈尊。其後上人作選撰集、池辺行テ読下ヘハ、大蛇出、聞ウナツキシケリ。上人言、我其時淨土法門知リタラハ、師匠ヲハ蛇道入マシキ者カト泣下ヘケリ。以聖如此。愚能自力他力可分別一事也。

・一期物語

或時物語云、当世人迷法門分際、云輒可解脱生死也。我師有肥後阿闍梨云人。智恵深遠人也。倩願自身分際、今度不可解脱生死、若此度改生者、隔生即亡故定忘仏法歟。然受長命報待慈尊出世、大蛇是長壽者也、吾当大蛇。但若住大海者可有中天恐。依之遠江国笠原庄内

桜池云池、取領家放文、願住此池。死期乞水入掌中一死畢。於彼池不風吹一率大浪自起、排上池中塵。諸人作奇特、注此由申領家。勘其日比、當彼阿闍梨逝去日時。有智恵故知生死難出、有道心一故願値仏世。然而不知淨土法門一故発如此意。我其時為得此法者、不願信不信一指授可此法門。於当世仏法者、有道心者期遠生縁、無道心者併住名利思。以自身輒言可出生死一者是知機縁分際一故也。

驚いたことに、孝行集と一期物語は多くの部分が重なる。おそらく孝行集は一期物語をやや和らげたものなのだろう。

一期物語と同じ法語を載せる文献は多いが、同一文章の説話を載せるものは少ない。それだけに孝行集が一期物語と近似することは興味深いことといえる。現在一期物語とほぼ同一の文章を収録することが判明している文献を上げれば、行観の選撰集秘鈔卷一（二期物語第一条、第四条）、良忠の浄土宗要集（東宗要）卷四（二期物語第十条）、信瑞の明義進行集卷三（一期物語第五条）がある。いずれの文献も鎌倉後期の学僧が編纂したものであるから、孝行集も、鎌倉後期かそれをやや降る頃の成立ということになろうか。

但し、孝行集には、一期物語には無かった、皇円が鈴杵を池に沈める記事（以下、鈴杵記事とする）や、法然が桜池に下

向する記事がある（以下、下向記事とする）。これらの記事についても検討が必要となろうし、第二の系統に属す弘願本との関係についても確認する必要があるだろう。そこで、次に弘願本との対照を試みることにする。

弘願本は、堂本家に巻一から巻三が、知恩院に巻四が蔵される残欠本で、巻末に「黒谷上人絵 釈弘願」とあって、原本は親鸞四代の法孫、弘願が所持していたとみられる伝本である。次に弘願本を上げる。⁽⁶⁾

或時上人物語云、当世の時機教の分際をしらずして、たやすく生死をいでがたしとおもへり。わが師肥後阿闍梨皇円、智慧あるがゆへに生死いでがたしとする。道心あるが遊へに仏の出世にあはんと思故に、遠江国笠原の庄に桜池といふ池あり。其池に龍となりて住さんとちかいて、臨終に水をこいて手に入て、願のごとく龍となりて住せり。人これをしれり。其願書を上人をして、社頭にてよ見あげさせまいらせられけり

傍線部が孝行集と重なるところである。法然の法語を除けば、一期物語ほどの近似は見出せない。だが、看過しがたい部分として、一期物語にはなかった、次に上げる孝行集の下向記事が、波線部に認められる。

其後上人作「選択集」、池辺行テ読下へハ、大蛇出聞ウナ

ツキ／＼シケリ。上人言、我其時浄土法門知リタラハ、師匠ヲハ蛇道入マシキ者カト泣下ヘケリ

下向記事は、弘願本以外の法然伝にもあるので、それらの法然伝と合わせて考察してみる（談義本の正源明義鈔もその記事を含むが、絵伝とは形態が異なるし、内容が増補されていてやや時代が降ると思われるので今は措く⁽⁷⁾）。

桜ヶ池下向の記事がある法然伝は、琳阿本、九卷伝で、次のようである。⁽⁸⁾

・琳阿本

上人後に彼池に尋て御渡ありけるに、蛇うきいで、物語ありけりと云云

・九卷伝

上人悲みのあまりに彼所へ下て、池の辺にのぞみて、称名念誦懇にして廻向せられけり

ここで注意しておかなければならないのが、桜ヶ池説話を精査した平祐史氏の次の指摘である。⁽⁹⁾

下向の記述を最も簡潔に取扱つていると見做れる『弘願本』の詞書に続く絵の部分を見ると、法然が二人の弟子らしき僧を具して、池の畔に端座し水面に姿を現わした龍身の皇円と対面し説教する図が描かれており、又『琳阿本』にも同じく「蛇身の闍梨に対面」の絵図が詞書に続いて描



図1 琳阿本（妙定院蔵）

かれている。このようにこれらの諸伝記の絵図の部分の語るところは、明らかに詞書の簡潔さを絵でもつて補足して語りかける意味をもつているものと考えられ、換言すれば、この絵図をもつて、法然が遠州へ下向したことを物語ろうとするに外ならないのである。下向記事を検討するためには、絵図も合わせて判断する必要がある。絵図に注目するならば、弘願本、琳阿本が同一構図であること

に気づく（図1参照。九巻本は詞書のみ伝存する）。これらの法然伝と、絵図において同一系統であるものには、古徳伝、行状絵図があり、古徳伝には、やはり桜ヶ池で法然と蛇身の皇円が対面している場面が描かれている¹⁰。つまり古徳伝は、詞書には下向記事がなくても、絵図によってその内容を伝えていることになるだろう。そこで、あらためて弘願本、琳阿本、九巻伝、古徳伝の詞書と孝行集とを比較してみたところ、一期物語に基づく私日記によって記事を増補した琳阿本、古徳伝が、一期物語に拠ったとみられる孝行集に類似するようだ。

この類似は、一期物語や私日記に拠らない部分からも窺える。皇円が蛇身となることを決意した部分を、私日記は

不^四如^三受^二長命之報^一、欲^四奉^三値^二慈尊之出世^一、依^二之^一我

將^三受^二大蛇身^一

とするのに対し、琳阿本は、

しかし長命の報をうけて慈尊の出生にあひたてまつらむと

思ひて、命ながきものをかむがふるに、鬼神よりも蛇道は

まされりとて、蛇にならむとするに

古徳伝は、

不如、長命の報をうけて慈尊の出世に逢たてまつらんには
と思て、命ながきものを案ずるに、蛇身はなを鬼神にもま
されりとて、蛇身をうけんとするに

として傍線部を挿入している。この挿入は孝行集にも

長命報感シテ、慈尊出世為レ待、長命思、不レ過二大蛇一、
我可レ成二大蛇一⁽¹⁾

として、傍線部にみられるのである。

古徳伝は、親鸞の孫である覚如が正安三（一三〇一）年に十七日間で詞書を執筆したが、門真市願徳寺所蔵の古写本の奥書に記されている。拾遺古徳伝の名称は、「古徳」が法然を指していて、当時の法然伝に漏れているもの、即ち親鸞の事績を補うものという意味になるが、覚如は短期間で詞書を仕上げるために、先行の法然伝を参考にしたらしい。琳阿本は、その主たるものであったと考えられている。つまり、琳阿本や古徳伝は、鎌倉末期に成立したことになり、孝行集と一期物語との対照で推定した、鎌倉後期かそれをやや降る頃という孝行集の成立年代と一致する。

孝行集と琳阿本・古徳伝とは、一期物語或いは一期物語に基づく私日記の類に拠ること、法然の桜ヶ池下向の記事を有すること、成立年代を鎌倉後期におくことにおいて一致する。したがって孝行集が典拠とする法然伝は、琳阿本や古徳伝に類する法然伝と推定出来よう。

高僧の絵伝は、鎌倉末期から南北朝期にかけて出現し、室町時代に盛行する⁽¹²⁾。法然の絵伝もその一つで、琳阿本や古徳伝と

いったような祖師報恩と念仏弘通を主な目的とする、伝道用の掛幅絵伝や絵巻物が多数制作されたとみられる。孝行集が典拠とする法然伝もそうしたものの一つなのであろう。

三、法然の桜ヶ池下向とお櫃納め神事

孝行集が、弘願本・琳阿本と同じく、絵図の説明ともなる下向記事有することは重要である。なぜなら、民衆に向かって古徳伝が盛んに絵解きされていたことを考慮して、孝行集の下向記事を検討するならば、そこには「ウナツキ／＼」といった語り口調が見出せるからである。この語りの調子は、下向記事と同じく一期物語にはない鈴杵記事にも認められる。次に、その部分を上げる。

此池住為池辺行、仏具鈴杵等入、不レ入上浮タリ。時阿闍梨云、此池主シ何ソ是ヲ不レ入、汝領家不レ乞、我ハ放文得、読懸下ヘハ即コフ／＼トテ入ス

鈴杵が池に沈む部分に使用されている擬音語「コフ／＼」は、臨場感を出しているだろう。

鈴杵記事は、下向記事とは違って、管見に入った資料の中では、孝行集にしかみられない記事であるが、下向記事と文の調子が似ていることから推して、話の出所は下向記事と同じであ

ると考えられる。下向記事は、先に考察したように、一部の法然伝にみられるが、現地の伝承もそのことを伝えていて、現地の伝承が法然絵伝に採り入れられた可能性が高い。法然伝は、浄土宗や浄土真宗で布教や勧進に用いられており、無学な民衆にも分かりやすいように、絵図を示しつつ法然の生涯やその教えを解説する、いわゆる絵解きによって語られることが多かった。祖師や高僧の伝記の絵解きは、人々に仏教の教理を説いた唱導に類するものであるから、唱導における説法が譬喩因縁譚だけでなく世俗説話や和歌物語等を探り入れて自由に語られていたように、絵解きもまた様々な話を採り入れていただろう。法然伝や法然説話に於ける下向記事は、そうした話の一つであり、鈴杵記事もまた同じ経緯を辿っていることが推測される。したがって、次に、下向記事、鈴杵記事と現地の伝承との関係について考察を試みる。

説話の舞台である桜ヶ池では、毎年秋彼岸の中日に、五穀豊穰、心願成就を願って、お櫃納め（納櫃祭）という神仏習合的な神事が行われる。この神事は、法然上人が龍身となった師の皇円を供養するため、赤飯のお櫃を献じて法要を営んだことに始まり、親鸞や熊谷直実がそれを継承して今日に至ると言われている。⁽¹³⁾ この神事があるからこそ、法然の下向が広く知られるようになり、法然の絵伝にも描かれたのであろう。

それでは、鈴杵記事についてはどうだろうか。神事の手順を簡単にみてみよう。お櫃納めでは、現在、御神櫃とともに志納櫃百数個が納められているが、かつては池の傍らに建つ神社（池宮神社）に一つ、皇円に一つと御神櫃二個のみが納められていたようだ。献上されるお櫃は、氏子の若者達によって、池の中心でくるくる回されながら、押し込むようにして沈められる。沈められたお櫃は、数日後に浮上がり、中身が空になっていけば神慮に叶ったとされる。また、お櫃を水中に沈める際に、水中に納まれば池神に受納されたことになり、直ぐに浮上すれば受納されなかったことになるという。⁽¹⁴⁾ 鈴杵記事と神事の手順とを対照してみると、鈴杵が池主に拒否される部分は、お櫃が池神に受納されない時にはお櫃が直ぐ浮き上がることに、鈴杵が池に沈んでゆく部分は、お櫃が池に納められる様子に、それぞれ影響を受けていることが推定される。

但し、鈴杵記事には問題が残る。鈴杵記事は孝行集にしか見られず、そのような伝承が存在したかを検討しなければならぬ。またお櫃納めは皇円の供養に始まるとされているが、現在桜ヶ池では、池神或いは龍神は皇円となっているから、鈴杵記事の皇円による池主への詰問は、皇円が自分自身に対して行ったことになり矛盾が生じてしまう。これらの問題の究明には、お櫃納めの来歴の考察が有効と思われる。そこで、桜ヶ池にま



図2 桜ヶ池（静岡県御前崎市）

つわる伝承を手掛かりに考えてみることにする。

天竜川流域にある桜ヶ池は、約二万年前に出来た砂丘堰止湖で、面積は約二万平方メートルもある大きな池である。池宮神社では、瀬織津比咩命を主祭神とし、相殿に事代主命、建御名方命を祀る。武御名方命は、周知のように諏訪大社の祭神で、桜ヶ池は諏訪湖と底で通じているとも言われているから、先学も指摘するように、桜ヶ池は古くから竜神が棲む池として信仰を集めてきたのだろう（図2参照）。

しかし、お櫃納めは、諏訪湖ではなく、箱根の芦ノ湖からもたらされたようだ。というのは、諏訪湖にはお櫃納めのような神事はないが、芦ノ湖では守護神の九頭竜明神に神主が赤飯を献じるという神事（箱根神社〈末社九頭竜神社〉の湖水祭）が行われているからである。このことは、神事の催行日や、桜ヶ池に伝わる皇円説話とは別の説話が証左となる。

先ず神事の催行日について検討してみる。芦ノ湖では、現在、箱根神社の例祭の前日、宵宮祭である七月三十一日に神事（湖水祭）が行われているが、かつては、六月十三日丑の刻に行われていたという¹⁵。お櫃納めについては、先に述べたように現在は秋彼岸の中日に行われていて、これは少なくとも過去三百年間は変わっていないようだ。しかし、現地の大方の伝承及び、正源明義鈔は、皇円の入定の日時を嘉応元（一一六九）

年六月十三日夜半と伝え、本朝高僧伝卷六十六の皇円伝には「於_レ今忌日、郷民備_二盛饌_一、祭_二於池上_一云」とある。このことは、お櫃納めも当初は六月十三日に行われていたことを示しているのではないか。とすれば、芦ノ湖の神事の催行日と桜ヶ池のそれは一致し、両者は同一の神事であったことになる。さらに付け加えるならば、皇円の入定日は、知恩伝に久寿二（一一五五）年八月頃とあり、元和三（一六一七）年に記されたい池宮神社三十七代宮司信政の覚書には、

信榮八代孫信弘久寿二年秋七月、比叡山之肥後阿闍梨皇円、奏聞勅許之由信弘談而、同八月彼岸中日御池御入水、從是御供御池納、同年勸請八幡宮

とあって、現在の催行日と重なる説も伝えられている。⁽¹⁶⁾ 彼岸中日説があるにも拘わらず、六月十三日説の方が知られているということは、お櫃納めと皇円の供養は本来別々のものであった可能性があるだろう。

次に皇円説話とは別の伝承である桜の前説話について検討してみる。この説話を載せる文献には、三国伝記卷十一、和漢三才図会、遠江国風土記伝等がある。これらの中で、現在のところ最も古い記録は三国伝記卷十一「相模阿闍梨快賢事」で、桜の前説話に続けて、皇円の説話を記述する。三国伝記の桜の前説話のあらすじを述べると、国司が都より初めて下向した折

り、桜の前という美女を連れてきたが、池の辺りで遊宴を催している時に、桜の前が池主（池ノ主）によって池中へと引き摺りこまれ、行方不明となってしまった。これに怒った国司は、岩石を焼いて池へと投げ込むこと七日七夜、大毒蛇の死体が浮かんだ。その後、国司は良政を行い、気候も安定、疫病も流行らなくなつて、池は桜ノ池と呼ばれるようになったという。地名起源を説くものである。また浜岡町が平成十一年に編纂した佐倉地区民俗調査報告書に拠れば、説話中の焼石を池に投ずる行為は、池辺で大火を焚いたり、池を荒らしたりして、水神の逆鱗を触発し降雨を促すという、雨乞いの習俗に通じるものがあつて、桜ヶ池が古くから雨乞いの聖地とみなされてきたことが想定されるという。⁽¹⁷⁾ だが、この説話が示唆するものはそれだけではないだろう。悪龍を国司が退治する話は、芦ノ湖の湖水祭にまつわる説話伝承、即ち、人々に悪さを働いていた芦ノ湖の守護神九頭龍明神が万巻上人によって湖底に縛りつけられたというものと通じる。平安末期の箱根山別当、行実が著したとされる宮根山縁起并序によつて、その説話を次に示す⁽¹⁸⁾（私に返点を付す）。

西汀有_二驛路_一。毒龍凌_レ浪拏_レ雲。人民多_レ免_二損害_一。
万巻臨_二彼深潭_一。築_二石台_一而令_レ禱。爾毒竜改_レ形。捧_二宝珠并錫杖水瓶_一。乞_二要受降_一。即呪而繫_レ之以_二鉄鎖_一。

号^二其幹^一為^二栴檀訶羅木^一。厥形九頭毒竜也。所^レ蟠湖水増^二風浪^一。山脚長洋々。台石未^レ礪。巍然^二于波間^一。

現在に伝えられている話には、子供を人身御供として毒龍に捧げようとする要素が加わっていて、桜の前説話に近似する⁽¹⁹⁾。おそらく桜ヶ池へ神事がもたらされた時に説話とともに伝わったのだろう。そして、この桜の前説話の意味するところからすると、お櫃納は災厄払いや五穀豊穡を目的に始められたのではないか。

以上のことから、お櫃納めが、箱根の神事を基とする可能性が高いことや、また、皇円のための神事ではなく、古くからの龍神のためであったことが推定出来る。それでは、お櫃納めが皇円の供養と見なされるようになったのは何時頃からであろうか。また古くからの龍神はどうなってしまったのだろうか。

これらのことについても、三国伝記が参考になる。三国伝記では、桜の前説話に続けて、次のような下向記事を伴った皇円⁽²⁰⁾（三国伝記は「相模阿闍梨快賢」とする）の説話を記述する。

其後、相模阿闍梨快賢ト云僧有。戒行全等^{（20）}。惠解共具。都率行人法花の持者也シガ、読経坐禪ノ隙ニ思ケルハ、受ニ生^レ於生者必滅界^一、送^二体^一於老少不定^{（21）}。今度生死不^レ離者三途ニ流転スベシ。如何^{（22）}。不^レ替^{（23）}肉身^{（24）}ニ弥勒出世ニ値ト願テ、屈身ノ行ヲ修^{（25）}大蛇身成テ、無^{（26）}主池ナレバ此桜池

ニ入テゾ住ケル。其弟子ノ法然上人、遠江国^{（27）}下向^{（28）}彼池^{（29）}辺ニ到^{（30）}給ニ、始ハ元姿ニテ対面シ、後ニ上人所望ニ依テ、大蛇ノ形ヲ現^{（31）}見^{（32）}給ケル社^{（33）}不思議ナレ^{（34）}云云。傍線部の記述からは既に、古くからの龍神（池主）はいなくなり、替わりに皇円が新しく龍神（池主）となったことが分かる。三国伝記は室町初期の成立とされている。その頃には桜ヶ池の龍神といえは皇円であり、お櫃納めも皇円の供養祭とされていた⁽³⁵⁾のだろう。

ここで、孝行集の鈴杵記事について考えてみたい。皇円が詰問した池主は、皇円自身とは考えられず、古くからの龍神とすべきであろう。三国伝記では、信仰の対象が、古くからの龍神から新しい龍神である皇円へと替わってしまった⁽³⁶⁾が、信仰の対象を直ぐに替えることは難しいと思われ、二柱の龍神が併存する時期があったに違いない。鈴杵記事とは、そのような時期のものではなかっただろうか。先に孝行集の成立時期を鎌倉後期かそれをやや降る頃と推定したが、それとも矛盾はない。下向記事と違い、鈴杵記事は、古くからの龍神と新しい龍神である皇円が完全に交替することにより、民衆の認識と合わなくなり消え去っていったのだろう。

記事の消長があるのは、やはり法然伝や法然説話が民衆の間で生きて語られていたからであり、孝行集のように民衆の間で

語られていたものが、他に幾つもあったのではないかと考えられる。現地では、法然が、蛇身三熱の苦を受けて苦しむ皇円を水晶の念珠で救った後、龍身の皇円から落ちた鱗を携えて、天岳院（菊川市中内田にある応声教院のこと。別院が桜ヶ池の傍らに立つ）で供養したという話が今に伝えられている。この話は、知恩伝巻上「皇円受三蛇身一事」に引用されている法華伝記巻七の、天竺波羅奈国の毒龍となってしまった沙門の苦を、遊学僧が沙門の代わりに法華經を造ることによって救うという話を翻案したものらしい。⁽²²⁾この法然説話により、桜ヶ池周辺で法然伝が語られていたこと、また、その地域の事情に合わせて法然伝が作り替えられていったことは明らかである。

このように変遷の過程で生じた幾つもの法然伝や法然説話の中には、地域や時代を超えて語られ、書き留められたものがあつただろう。そうしたものが、下向記事であり鈴杵記事であつたと思う。

四、桜ヶ池説話と孝行

法然の桜ヶ池下向が、法然の絵伝に長く受け継がれたのは、鈴杵記事のように周辺の事情の影響をあまり受けなかったことであろうが、この説話が師僧皇円の供養という法然の徳行を讃

えたものであつたからだろう。そして、その供養が先祖供養と同じく秋彼岸の中日に行われることは、追善において法然が民衆の模範であつたことを強く示唆しており、下向譚が民衆教化に適した伝承であつたことが知られる。だが、なぜ師僧の供養が先祖供養と等しいとみなされ、法然が民衆の模範たり得たのだろうか。

浄土門の主要經典である觀無量壽經には、極樂浄土に生まれることを願う者が修行すべき三福が説かれているが、その中の一つに、

一者孝養父母、奉事師長、慈心不殺、修十善業

がある。ここでは「孝養父母」「奉事師長」が並立しており、また善導の觀經疏卷二にあるこれらの部分の解釈にも、「父母及師長者、名為三敬上行一也」とあつて、両者が同じ概念で捉えられるべきものであることが分かる。

だが、觀無量壽經だけが、民衆の意識形成に影響しているのではないだろう。弟子の安樂坊遵西の父のために法然が行ったという逆修説法「四七日」の「孝養父母」「奉事師長」の説明を基に考えてみる。それらは各々、世間と出世、即ち在家用と出家用に分けて説明され、世間孝養・世間師は孝經や五常など儒教を、出世孝養・出世師は清信士度人經、梵網經、淨心誠觀法など戒律に関する仏典を、説明の主な拠りどころとしてい

る。つまり、実践については、儒教や戒律によって規範が示されているのである。

孝と戒律といえ、直ちに想起されるのが、大乘菩薩戒の主要経典である梵網經下の次の部分であろう。

釈迦牟尼仏、初坐^三菩提樹下^一、成^二無上覺^一、初結^三菩薩波羅提木叉^一、孝^二順父母師僧三宝^一、孝^二順至道之法^一、孝名為^レ戒、亦名^二制止^一

注目されるのは、父母も師僧も同じ孝順の対象であるという点で、これが民衆の意識の底流にあり、民衆に先祖の供養と師僧のそれとを同質なものとして認識させていたのではないだろうか。梵網經のこの文章では、儒教の徳目であるはずの孝は、仏教者が遵守すべき戒となっていて、儒教の孝と仏教の孝とが一致している。そのため、仏教の孝を説く上で重要視され多くの文献に引用されてきた。

それに加えて、梵網經は古くから各地に流布していたらしい。説話、願文の思想と信仰を考察した田中徳定氏によれば、梵網經下に

若父母兄弟死亡之日、応^レ請^二法師^一講^二菩薩戒經^一福資^二亡者^一、得^丙見^二諸仏^一生^乙人天上^甲、若不^レ爾者、犯^二輕垢罪^一とあることから、孝謙天皇は、聖武天皇の一周忌に、梵網經の無上の福力で父聖武天皇を浄土へ赴かしめるべく、全国の寺院

で梵網經を講説したという。それによって、仏教の戒律が儒教倫理の孝と同義であるという理解が僧尼に浸透したようだ。⁽²³⁾僧尼に浸透しており、また在家の人々にとっても主要な仏事である追善供養に利用されたのであるから、梵網經のこの文章が民衆に影響していたことは十分に考えられるだろう。

ところで、法然の逆修説法が出世孝養に引用する梵網經の箇所も、先に上げた文章からである。しかし、次のように父母と師僧を上げて三宝にはふれていない。⁽²⁴⁾

梵網經^ニ説^下孝^二順父母師僧^一名^レ戒矣

法然の逆修説法は、師僧の恩を重要に考えていたらしく、出世師で次のように述べている。

出世^ノ師者、教^下可^三出^二生死^一趣^二菩提^一之道^上師也。或^ハ訓^二聖道^一之得道^一、或^ハ教^二淨土之往生^一也。各隨^レ宗教^ニ天台真言三論法相等^一師也。如^レ是教^ニ出離生死成仏得脱^一之道^一師僧之恩、勝^二父母之恩^一。故道宣律師云^二父母七生師僧累劫恩者無^レ知^ト矣

師僧を特にとり上げる風潮は、逆修説法に限らず一般的であったようで、弟子を責める際の注意を述べた雑談集巻一9「同法呵責^ノ事」にも次のようにある。⁽²⁵⁾

高野ノ大師ノ云、四恩ノ中ニ、父母ノ恩雖^レ重^一只養^二一世^一生身^一。國王ノ恩雖^レ貴^一偏^二ニ喜^二現世^一榮^一。衆生ハ累世ノ

父母也。不^レ可^レ如^シ今世父母^ニ。此ノ中ニ三宝ノ恩尤モ大也。但シ仏法ハ幽玄ニシテ不^レ可^レ知。菩薩亦不^ニ現前^一。當時現前ノ人師ノ恩尤モ大也。知^ニ父母国王衆生恩^一事、依^ニ現前師恩^一。仏像無^ニ言説^一

道宣の浄心誠観法ではなく空海の性霊集巻八「為先師講釈梵網経表百一首」を引用しているが、師の恩が心地観経の説く四恩の中で最も勝れるとしている。これは雑談集が「現前師恩」とするように、父母と並んで師は、直接に人々に接する身近なものであったからであろう。

以上のことから、法然の桜ヶ池下向を考えてみるならば、蛇道に落ちた皇門を救おうとする法然は、孟蘭盆経に説かれる地獄に堕ちた母親を救う目連のごときである。孟蘭盆会は一面施餓鬼会でもあるが、因縁集には「中古ヨリ以来、龍心申シナタメテ今ハ里人アツマリ施餓鬼飯ノコトクシテ池底ヲサムル也」とあって、お檀納めの神事が施餓鬼に比されている。⁽²⁶⁾法然は父母の追善供養という孝行の模範を示していると言えるだろう。

宮崎円遵氏は、

中世に出来た源空伝が十余点に達し、他の高僧に比して著しくその数が多く、恐らく聖徳太子の伝記の数に次ぐかと思われるが、それは上記のような絵解や唱導の盛行によるところが多いであろう。したがってそれは源空の徳行や靈

異を讃仰するのが眼目となるのは当然で、実録的意義は少ないのは自然の勢いである。この点においてこの種の源空伝の史料的价值が問題とされるが、しかしまたこれ等の源空伝によって、源空の生涯や浄土の教説を民衆の間に定着せしめたのであり、その果たした役割はまた歴史的にも没却できないであろう。

と述べている。⁽²⁷⁾民衆にとって身近な父母、師僧の追善供養という孝の徳行と、龍神の教化という靈験を有する法然の桜ヶ池下向譚は、民衆教化の具であった法然伝や法然説話に適したものであったに違いない。だからこそ、孝行集にも収録されて、民衆に孝行の模範を示しているのだろう。

注

- (1) 井上光貞氏『新訂 日本浄土教成立史の研究』（山川出版社、昭和50年〈初版、昭和31年〉、井上光貞著作集7〈岩波書店、昭和60年〉に再録）三章三節三。また、速水侑氏『弥勒信仰——もう一つの浄土信仰——』（評論社、昭和46年）V2も参照されたい。

- (2) 黒田彰先生『静嘉堂文庫蔵孝行集』（『愛知県立大学文学部論集（国文学科編）』39、平成3年2月）に翻刻を載せる。また内容の詳細については、同先生『中世説話の文学史的環境——（和泉書院、平成7年）I三参照。

- (3) 中井真孝氏『源空聖人私日記』の成立について（『仏教文

化研究』29、昭和59年3月、『法然伝と浄土宗史の研究』〈思文閣出版、平成6年〉に再録）。

(4) 孝行集は注2前掲論文に拠り影印を参照、一期物語は藤堂恭俊博士古稀記念会編『藤堂恭俊博士古稀記念 浄土宗典籍研究 資料篇』（同朋舎出版、昭和63年）に拠る。

(5) 孝行集「若今度生ヲ改、隔生即妄故定テ仏法可_レ妄テ」の「妄」は、法華文義卷六「隔生即忘」などの通常の表現からすれば「忘」とあるべきである。しかしながら、私日記も「若度度替_ニ生_一隔_ニ生_一即妄妄故定妄_ニ仏法_一歟」として「妄」を用いる。孝行集は私日記とも関係するのかもしれない。なお法然伝における「隔生即忘」の問題については、田村圓澄氏『法然上人伝の研究』（法蔵館、昭和31年）三部九章、梶村昇氏「遠州桜が池説話の意味するもの」（『浄土宗学研究』19、平成5年3月）参照。

(6) 井川定慶氏集解『法然上人伝全集』（昭和27年）五三二頁に拠る。

(7) 孝行集「其時浄土法門知リタラハ、師匠ヲハ蛇道_ハ入_レマシキ者カト泣下ヘケリ」が、正源明義鈔「そのゆへはこの浄土門をいま七八年箇年以前に、みいだしたらばわが本師肥後の阿闍梨をばよも蛇道にはおとしたてまつらじと、かなしむなりとおほせけり」に近似する表現であることは、注意する必要がある。

(8) 琳阿本、九卷伝は、それぞれ注6前掲書五四八頁、三四八頁に拠る。

(9) 平祐史氏「遠州桜ヶ池譚私攷」法然上人伝研究会編『法然上人伝の成立史的研究』四、研究篇（知恩院、昭和40年）

(10) 法然伝の絵図については、真保亨氏編『法然上人絵伝』（日本の美術95、至文堂、昭和49年）、信仰の造形的表現研究委員

会編『拾遺古徳伝絵 法然聖人絵 法然上人絵伝 善導大師画像 法然上人絵像』（真宗重宝聚英6、同朋舎出版、昭和63年）等参照。諸本の絵図の関係については、米倉迪夫氏「琳阿本『法然上人絵伝』について」（『美術研究』325、昭和58年9月）等参照。なお行状絵図は、法然と龍身の皇門を消して桜ヶ池のみ描くが、これは忍濃が勅修吉永円光大師御伝縁起に「近代杜撰の濫述をば扱ひすて、たゞ門人旧記の実録をのみ取用て類聚して編をなせり」と述べるように、編著者の舜昌が、絵図から史実ではない部分を排除してしまったのだろう。

(11) 私日記は『法然上人伝の成立史的研究』二、対照篇中（知恩院、昭和37年）二〇三頁に拠り、『浄土宗全書』十七、八十六頁を参照、古徳伝は注6前掲書五九三頁に拠る。

(12) 米倉迪夫氏「掛幅伝記絵研究の課題——法然伝絵から考える——」（『仏教文学』24、平成12年3月）参照。

(13) 『桜ヶ池の伝説』（桜ヶ池宮神社社務所）。

(14) 浜岡町佐倉地区民俗調査報告書『桜ヶ池のお櫃納め』と佐倉の民俗』（浜岡町教育委員会、平成11年）一章、杵嶋典子氏「遠州の御櫃納神事」（『神道宗教』197、平成17年1月）参照。

(15) 箱根神社社務所編『箱根神社大系』上（昭和5年）箱根神社概説。なお三田全信氏は、皇円入滅の記録をめぐって、知恩伝の久寿二年八月頃と正源明義鈔の嘉応元年六月十三日を検討し、根拠に乏しく消極的ながらも、隆寛との関係から嘉応元年説を支持した。その際「六月十三日とは何に拠つたものであろうか」と疑問を呈しているが、それはお櫃納めの神事に拠った可能性が高いだろう（三田氏『成立史的 法然上人諸伝の研究』（光念寺、昭和41年）二）。

(16) 佐倉東武氏『花ぐわし 系図でたどる桜ヶ池の歴史』（池宮神

社、平成11年）「信弘（八代）」。

(17) 注14前掲書、一章。

(18) 注15前掲書、史料編一に拠る。

(19) 『箱根神社大系』下（昭和10年）史料編四参照。桜ヶ池の皇円の説話にも、彼岸中日に里人を池底に沈めていたというものがある（因縁集）。

(20) 池上洵一氏校注『三国伝記』（三弥井書店、昭和57年）に拠る。三国伝記の法然が人身の皇円に對面した後、蛇身を現してくれるよう皇円に懇願していることについて、若干補足したい。この順序は正源明義鈔とは逆で、正源明義鈔が蛇身の皇円に對面した後、「まことの源光にておはしまさば、本身に伏して現ぜさせたまへ」と懇願することから考えると、三国伝記の順序は聊か奇異に見える。しかし、この順序は現地の伝承を検討すると理解出来るようだ。現地の伝承では三国伝記と同じく、法然は人身の皇円に對面した後、皇円に龍身になることを望む。そして、それに続けて、龍身になったことよって蛇身三熱の苦を受ける皇円を、法然が水晶の念珠で救うのである。三国伝記が人身を先にして龍身を後にするのも、現地の伝承と同じように、後に続く話があったからであろう。

ところで三国伝記が複数の伝承を接合することに関して、小林直樹氏が、桜ヶ池説話をとり上げている（『三国伝記』の「方法―別伝接統と説話連関をめぐって―」〈国語国文〉59・11、平成2年11月）、『中世説話集とその基盤』〈和泉書院、平成16年〉に再録）。推測の域を出ないが、二つの説話は共に地域伝承の色相いが濃く、全く無関係のものとは思われない。なお、選択本願念仏集秘鈔卷一に上げられる法然の師の一人に「相模阿闍梨光樹房」とみえる。三国伝記の伝承と関わりがあるのか

もしれない。

(21) 御攢納めの神事と、法然による皇円の供養との結び付きについては、梶村氏注5前掲論文にある指摘が重要で、法然の弟子禪勝房縁の蓮華寺（静岡県周知郡森町）が関与したのではないかと思われる。八形山安住院蓮華寺は、六五〇年頃役行者が八形山に籠もり、慶雲元（七〇四）年に行基が開創、当初は法相宗の寺院であったが、天長八（八三二）年、慈覚大師円仁が天台宗に改宗して、一山三十六坊を建立、七堂伽藍を整備したと伝えられる。鎌倉期には、遠江国一宮小国神社の別当を勤め、遠江国における天台教学の学問寺として隆盛を極めたようだが、武田の兵乱により諸堂を焼失、慶安五（一六五二）年には一坊が残るのみとなり、現在に至るといふ。梶村氏も紹介しているのだが、この蓮華寺には、嘉応元年に皇円が招請されて、奥の院に正覺院を建立、衆生済度の大願をたて念仏三昧の修行をした後、六月十三日に桜ヶ池に入定した、蓮華寺では皇円の三十三回忌までは春秋彼岸に赤飯供養と念仏三昧を行ってきたという伝承がある。この伝承に関わる記録が、宝永年間（一七〇四―一）より記録され続けてきたらしい蓮華寺過去帳の「当山旧記」に、次のようにある。

七十四代法親上人事、是本より天台宗^二而山門之僧なりし与、事之念仏を尊んて法然上人より日課を受、専ら念仏修行せり、当国山梨^一因縁有りて事之念仏宗を造立して開山と成、于今繁昌せり、輪光寺と号す、七十二代禪勝上人^三杯も法然より念仏を専修行して終に入定せり、夫故自他之人皆上人とそ申けり、桜池肥後阿闍梨ハ法親上人の法縁にて当山に余程住居せり、是ハ大竜の身を現して弥勒の出世を相待となり、法親度々西方往生を勧め玉へ共、無得意し

て彼池に入ル、度々禪定^ニ入、国々之池を觀するに皆主有
り、只桜^而無主なりとて或日天地悉しん動して白雲近來
り終に飛去給ふ、年々之祭りも三十三年の此迄は当山より
参りしか、遠所故自然と怠りけり、或時彼池□法觀被参て
相見を乞給ふに、人身を現して相見せり、法觀「」龍身
にて相見あれかしと被申ければ、直^ニ白雲起て池中へ入
「」行てさす事切なりと、依之法觀彼□を吟味して去り
「」拜しあん穩なりとて再池に隠れ給ふ、于今靈現多し
法觀は、文永二一五（一二六五—八）年に住職を勤め、文永六
年に入定、林光寺（浄土宗、袋井市春園）を創建したと伝えら
る僧で、蓮華寺には室町末期の供養塔が残るが、その他は未詳
である。法觀が桜ヶ池入定後の皇円に對面したという他の資料
では見られない記述について、ご住職である高木善立師
（百三十九世）にご教示頂いたところによると、この地域では
知られた伝承だということであった。この「当山旧記」の、蓮
華寺の僧侶が桜ヶ池で皇円の供養を行っていたという記事は、
蓮華寺がお檀納めに関与し皇円の供養と結びつけたことを示し
ているだろう。「当山旧記」は、時代を降る文献であろうが、
蓮華寺は、小国神社の別当であり、周辺の神社の鎮守祭祀にも
関わっていたというから、この寺院が桜ヶ池の神事に関与した
可能性は十分にあると考えられる（『天台宗八形山安住院蓮華
寺』〈蓮華寺、平成16年〉参照）。

(22) 法華伝記には、毒龍が法師恩に感謝し、珠三枚を遊学僧に与
えるという話が載せられている。応声教院には、法然が皇円の
苦を救った際に龍身から落ちたとされる三枚半の鱗が遺されて
いるが、それは法華伝記の珠三枚を基にしているものだろう。

(23) 田中徳定氏「説話・願文にみる思想と信仰の総合的研究」(『私

学研修』165・166、平成17年12月)。

(24) 『古本漢語燈録』(佛教古典叢書、中外出版、大正13年) 卷八
所収「逆修説法」第十一之余に拠る。

(25) 山田昭全、三木紀人氏校注『雑談集』(三弥井書店、昭和48
年)に拠る。

(26) 築瀬一雄氏編『内外因縁集・因縁集』(古典文庫337、昭和50
年)に拠る。

(27) 宮崎円遵氏「法然上人伝の絵解と談義本」井川定慶博士喜寿
記念会編『日本文化と浄土教論攷』(井川博士喜寿記念会出版
部、昭和49年、宮崎円遵著作集7『仏教文化史の研究』(思文
閣出版、平成2年)に再録)。

付記

蓮華寺や法觀上人のことなどについて重要なお話をお聞かせくださ
いました、蓮華寺のご住職高木善立師並びに、貴重な法然上人伝絵
詞の写真の掲載をご許可くださいました妙定院に深く感謝申し上げ
ます。